

いの流水俳壇

「新年」「当季雑詠」

【特選】

玉砂利を踏む幸せの初詣

大川 節弥

〔評〕「初詣」は新年の季語で、元旦の朝早く、鎮守の神社または恵方にあたる社寺に詣でる事で「初参り」とも言う。一般的には、除夜の鐘の終わるのを待って参拝することを「初詣」という。今年米寿を迎えた作者は、日々のウォーキングで足の訓練に励み、その甲斐あって見事な健脚は、まことうらやましい限りである。神社の参道、神域に敷かれた玉砂利を「八十八才」の高齢で、元気で踏んで行く幸せ、自分の足で初詣の出来た幸せを神に感謝し、今年の幸せも願ったであろう。改元の年、平成三十一年の元旦は、穏やかな初日が町を包み、平和の光が今年の平穏を思わすようであった。また、そうであって欲しい。

早き梅咲くふる里のめでたけれ

渡邊ゆかり

〔評〕梅の開花は早いもので、一月下旬から二月初めとされているが、近年地球の温暖化が進み、特に自然現象の変化が随所に見られるようになった。揚句の「早き梅咲く」もその一つであろう。梅は清楚で気品高く、百花に先がけて咲くと言われており、花は白色五弁であるが、紅色、淡紅色もある。作者は新年の挨拶に、懐かしいふる里「春野町」を訪れた。すると、新しい年の始めを言祝ぐように、思いもよらなかつた清々しい香の梅の花が迎えてくれた。ふる里に来た嬉しさと同時に里にある安らぎ、また梅花に新年のめでたさをも感じる。

夕鶺鴒群がり開き山越ゆる

片岡 豊子

〔評〕鶺鴒は越冬のためシベリアから大群をなして、日本に20種が飛来する。各地に分布し、田畑や山林に棲息し、昆虫を採食する小鳥で肉が美味なため、昔は捕獲、食用にされた。昭和二十二年から狩猟が禁止され、現在ではできなくなつた。夕近く空を見上げると、いきなり頭上を数十羽の小鳥の群れが渡って行く。その様子を「群

がり開き」と表現。その一塊の群れは突然散らばり、向山の上に来るとまた一塊になり、山を越して行き、見えなくなつてしまった。予期しない偶然の出会い。「山越ゆる」の借辞が良い。作者のもう一度見たい思いも感じられる。鶺鴒にある群れを成す習性も見え、その感動が伝わってくる。

【入選】

ねんごろに老の筆先初日記

植田 紀子

連綿と家長の務め初湯かな

岡村 嘉夫

深梅はちと早過ぎるわいと空

東谷 晴男

夜は夜の色のなかなる寒椿

島村かりん

煤払いして明るさの戻る部屋

森岡 照月

穏やかな日和賜り初詣

川村 博子

日々平凡今日も一人のむかご飯

津田 久美

【一句抄】

隣りの子晴れ着姿へお年玉

岡村 嘉夫

改元の年の初日を迎えけり

大川 節弥

歌加留多遠嶺恋いしき一首かな

植田 紀子

風落葉安全地帯を抜けゆきぬ

東谷 晴男

冬岬オーイと呼ばれている男

島村かりん

夕映えの中全山は眠りたる

津田 久美

朝日射す小枝にほのと梅二輪

川村 博子

初詣幸せ託す福袋

森岡 照月

飾して身の引き締まる空気かな

渡邊ゆかり

初釜や青竹落つる水の音

村田佐代湖

白雪や還暦といふ赤いシャツ

片岡 豊子

電車待つ夕暮という寒さかな

刈谷 志津

次題「当季雑詠」 締切／毎月1日

投句先 教育委員会事務局

いの町1700-1 ☎893-11922

今月のごども川柳

冬の空 空気がすんで 夢見える

伊野小 5年 永野 朋美

【評】どんよりした日は気もちも重くなるのに比べ澄んだ空気に心も晴れ晴れとして視界も広く夢も広がる。健康で活発に草野球などして二刀流の夢など追っているのかな。

ねていると ねこがいれると よってくる

伊野南小 4年 平田 咲樹

【評】寒い時は猫やお年寄り炬燵が一番だろうね。この場合は「寝ている」とあるからベッドへ猫が頭を突っ込んできたのだ。昔、電気暖房器具の無い時期、猫を炬燵替わりにしたことも。

冬になり のきしたつらら せいくらべ

伊野小 5年 溝淵 翔

新学期にぎわう教室 あったかい

伊野小 5年 田村 昂

校庭に落ち葉ちりばめ パズルだな

伊野小 5年 岩本 桃乃

こたつはね 温かくなり ねむりそう

伊野南小 4年 中平 彩綯

ざっそうが ゆきをかぶって かくれんぼ

枝川小 4年 山野上弥那

6年生 無言でそうじ ステキだな

枝川小 4年 森本 美来

父とする キャッチボール いい音だ

長沢小 5年 山中 聖也

あったかい おなべを食べて 笑顔だね

川内小 6年 西内 結音

「ごども川柳」は町内全小学校の児童のみなさんを対象に募集しています。次回提出締め切りは5月15日(水)です。たくさんのおみなさんの応募をお待ちしています。(応募は各小学校を通じてお願いします。)

※選評は、川柳連会のみなさんをお願いしています。